

英訳歌仙抄

—The Monkey's Straw Raincoat をめぐって—

小田桐 弘 子

プリンストンの歌仙

ニューイングランドの秋の紅葉のみごときは「あめりか物語」にすでに永井荷風によって讃嘆されている。この華麗ともいいたいほどの秋を知り、枝にかかる雪見の宴を楽しみ、ややホームシックにおちいった旅人に、遠見の桜と思わせるマグノリア、山々や遙かな丘に点々と薄紅色の花水木、流れに光る蛍の明かりに、風流人ならずとも、腰折れの一句や二句、口ずさんでしまうような、プリンストンでの客員研究員としての一年は1976年6月に終わりを迎えた。

1976年6月末にプリンストンを去る日 came。プリンストン大学東アジア学科に招いてくださった今は亡きマリウス・ジャンセン先生のご好意で、イギリス人のマーティン・コルカット教授が運転して、ケネディ空港までお二人で送ってくださった。(先年人文学部公開講演会にコルカット教授をお招きした。幕末の岩倉使節団のアメリカでの訪問地など、当時の米紙に報じられた資料をも掘り起こした実証的研究を、明晰な日本語で講演していただいた。平川教授の「比較文化論」の時間を振替授業として行われたので、聴衆は英米学科の学生が中心であった。外国語を学ぶことの本質的な意味を、英米学科学生にとくに、知らしめ考えさせられたような、感想が多かった。その後、ジャンセン先生の後をうけて、2001年春期まで E.A.S. の Dean の任を果たされた) 大学町プリンストンをひとめぐりし、ルート1経由で延々3時間かけての空港への道は、短く感じた。この一年間を大学のファカルティ・アパートメントの向う三軒両隣りで過ごした野口武彦・芳子夫妻と、ブダペストで開催される国際比較文学会に出席する予定で、まずはパリの友人宅で暫く居

候することとして、ヨーロッパに行くため、ケネディ国際空港にむかったのである。この時、再び此の地を訪れることがあろうとは、予想もしなかった。

二年後の春、アール・マイナー教授から松尾芭蕉の『猿蓑集』の共同研究・翻訳の申し出をうけた。旅費・滞在費などのスカラシップをプリンストン大学が前回と同様に、提供してくださるということであった。私の夏休みを利用して、1978年の7月はじめから10月頃までの間、この共同研究に参加することになった。近世文学、まして芭蕉は大学院時代にも、よく味わっていなかったということ、さきの1975年から1976年の、プリンストン大学大学院のマイナーゼミで痛感した。むしろ、マイナーゼミでの優雅ともいえる、「座の文芸」風の共同鑑賞・翻訳の授業で、連歌に続いて芭蕉の連句もよみ、充分な予習時間に恵まれたおかげで、たくさんの先学の業績にふれることもできた。連歌に関しては、本誌第4輯に「英訳連歌抄」と題して、その一端を紹介した。世界中によくしられ、すでにやや多く英語圏でも翻訳されている、松尾芭蕉の連句集『猿蓑集』に今回は焦点をあてて、鑑賞していきたい、ということになった。

The Monkey's Straw Raincoat and Other Poetry of Basho School について

はじめに「目次」を開いてみよう。英文のまま記してみる。

CONTENTS

PREFACE

ACKNOWLEDGEMENTS

ABBREVIATED REFERENCES

INTRODUCTION

1. Three Earlier Sequences

Poetry Is What I Sell (from *The Hollowed Chestnuts*, 1683)

In The Month of Frosts (from *A Winter Day*, 1684)

Beneath the Boughs (from *The Gourd*, 1691)

2. *The Monkey's Straw Raincoat* (1693)

“My Preface.” by Kikaku

Part One: Winter (Stanzas 1-94)

Part Two: Summer (Stanzas 95-188)

Part Three: Autumn (Stanzas 189-264)

Part Four: Spring (Stanzas 265-382)

Part Five: Four Kasen by Basho and His Followers

Even the Kite's feathers

Throughout the Town

At the Tub of Ashes

Plum Blossoms and Fresh Shoots

Part Six. Various Compositions

“A Record of the Unreal Hermitage.” By Basho

Shinken's Essay

The Diary by His Side

Jōsō's “Postscript”

3. A Later Sequence

If Fine While Still Green (from *Fukagawa*, 1693)

BIBLIOGRAPHY

INDEXES

Index of Critical Terms

Index of Poets in Kasen

Biographical Index of Poets

Introduction から、1頁として総頁数394を数え、その他『図説芭蕉』から転載を許された旅日記などを加えると、400頁余となる。私たちの協同研究・出版以前に、芭蕉の英訳書はかなりあり、多くの読者をえているし、アメリカやカナダにはハイク詩人も多数いた。『奥の細道』などは複数の翻訳もあるし、「古池や」の訳数は数百もあるといわれている。本著の参考文献目録に記したように、1978年までに手にはいる研究書・関係文献・図鑑などを共同で鑑賞し、味わいつつ、翻訳するという手順をふんで、一冊にまとめたケース

は多分、みられないであろう、と思われる。『猿蓑集』の部分訳は他にも多いが、其角の「序」から、丈草の漢文による「跋」文までの完全英訳は今まで見たことがないので、チャレンジする甲斐のあるものであったといえよう。

PREFACE「序文」では、日本人にもっとも好まれていて、かつ西洋の読者にも親しまれている松尾芭蕉について、俳諧について、テキストの取り扱い方、発句の訳し方の問題、とくに連句翻訳に際しての諸問題など、今回の『猿蓑集』英訳に対する姿勢等を述べている。次の[Introductuion]では左頁に芭蕉の弟子小川破笠によって描かれた松尾芭蕉の肖像の写真をおき、右頁に芭蕉に関してやや丁寧に、しかしおもに作品を示して解説をくわえている。芭蕉の全生涯については、Ueda Makoto と Donald Keene 博士の名著を参考にしてほしいと、註を加えながら「芭蕉と俳諧」に進み、近松門左衛門や井原西鶴を生んだ時代的背景を考察した。芭蕉は 'the thirty-six stanza sequence (kasen)' 「歌仙」こそ、'as the ideal for his most serious haikai' で、他の詩(俳)人たちと集まり、共同で連句を構成する、すなわち「座の文芸」を重視した。前に記したように、この観点から、「詩あきんどの巻」(『虚栗』)にはじまる、「猿蓑」に至る以前の三歌仙についてふれた。「Haikai in Japanese Literary History」では、歌仙の発句を独立句として句作・鑑賞させた芭蕉について、'Bashō's art is of course the result' といいつつ、何世紀にもわたる和歌の伝統につながっていると考え、『古今和歌集』の「誹諧歌」から『新古今和歌集』、連歌俳諧にいたる文学伝統にたちかえった。英語圏読者にはミルトンの“*Paradise Lost*”に言及し、「百人一首」に関して、西洋の読者に対して、Sydney, Spenser, Shakespear や Donne の sonnet sequence を思い起こさせ、違いをパラレルに説明して、理解を深めるようにしている。

続く「Some Canons of Haikai」には、もっとも頁数をさき、連歌俳諧・俳諧の連歌について書式・形式・内容・歌題・俳諧言語と和歌言語の違いなど、芭蕉の先人、心敬(1406-75)宗祇(1421-1502)、また後代の蕪村の特徴の例を示し、芭蕉の切り開いた世界を展開している。①これに次いで、「Examples from Thirty-Six Stanza Sequences」として、「猿蓑集」から「灰汁桶の巻」“*At the Tub of Ashes*”をとりあげて、先の連歌との違いを明確にした。最後の「Hokku in *The Monkey's Straw Raincoat*」では、内容

や参加している俳人・句数などを解説。俳諧の連句の発句を独立させた意味・意義をくりかえし考え、芭蕉の示した特徴や、『猿蓑集』中の最初の四巻は382句に及ぶ発句から成り立っていること。和歌・連歌との用語の違いなどをもみていったが、使用言語が異なるということは、単に言葉の問題ではなく、芭蕉のしている視界や交際・対応する人々、芭蕉の生きる社会が違うことを意味していることはいうまでもない、ということを確認することができた。「目次」に記したように、『猿蓑集』のすべてを翻訳したが、“俳諧の古今集”といわれている『猿蓑集』の第一の巻は従来の和歌・連歌集とはっきり異なり、「冬の巻」で始まっている。すでに述べたように、漢詩文もふくまれ、「芭蕉が生前みずからの意志で公表した唯一の俳文」②の「幻住庵の記」もあり、芭蕉の心象風景がうかがわれ、翻訳の作業中も思わず知らず創作者芭蕉の内面にコミットするように導かれた。

「1. Three Earlier Sequences」では、『虚栗』から「詩あきんどの巻」、『冬の日』から「霜月やの巻」と、『ひさご』から「木のもとにの巻」をとりあげている。これらを取りあげるにあたり、基本テキストとして『連歌俳諧集』（輝峻康隆・中村俊定注解、日本古典文学全集）を使用した。

『猿蓑』以前の『虚栗』の「詩あきんどの巻」は、其角が編集して、其角が序をかき芭蕉が跋文を記したものであるが、序文に示される其角の情熱はうかがわれるけれども『猿蓑』に示される蕉風には至っていない。むしろ二人の李白や杜甫への傾倒ぶりが如実で、注解者の解説、すなわち「談林俳諧の風俗詩的卑俗性を克服している」③が「漢詩的ポエジーのみならず、その詩形式までも取り入れた極端なレトリックは、観念的な追求と操作の結果であって、まだここには対象を凝視する目や心はない。内なるオリジナルな詩情が流露した句は求むべくもない」④という言葉を参考にして、実作にあたったが、後の「幻住庵の記」に記しているように、唐詩人たちへの憧憬の基を想像しえた。『ひさご』からの「木のもとにの巻」は、多くの評者の指摘するように、芭蕉が『奥の細道』の旅を終えた後の歌仙である。後に『三冊子』に「この句の時、師の曰く、花見のかかりを少し得て、かるみをしたたり」と記されているように、「蕉風の規範とすべきもの」⑤という評をうるほどの新風を示していることを、翻訳の過程で実感することができた。このように、

芭蕉の蕉風確立までの歌仙を、先学の研究・解説を辿り、導かれつつ一句・一句を鑑賞しつつ英訳した。

英訳のプロセスは、まず小田桐が第一訳を行い、それをマイナー教授に披露し、何故このように訳したかを述べ、小田桐訳の表現の間違いや、貧困な詩的言語をマイナー教授の豊富な詩的英語に直し、その後二人で一句一句の作品の世界を想像しながら、決定訳稿を制作していく作業を経た。まず、はじめにタイトル『猿蓑』の英訳から英語圏では優れた先学により、*The Monkey's Raincoat* と定着したタイトルがあったが、小田桐のイメージとして、どうしても *The Monkey's Straw Raincoat* と 'straw' を入れることを主張した。わがオリジナルとおもい、やや得意であったが、しばらくしてすでに1958年に日本学術振興会により、かつての恩師—*A History of Haiku* (1963-64) をのちにお一人で出版され、おおくのヨーロッパの人々に Haiku をしらしめた—R. H. Blyth 先生が、小宮豊隆・市川三喜先生等の日本側からも、国文学者・英語学者が動員され、英国人のブライス先生のご協力のもとに *Haikai and Haiku* が出版されている。やや薄手な書であるが、1958年という時代を思うと、それでも内外の協力になる日本文学の、しかも、「正岡子規国際俳句賞」が制定されるなど、今日の盛況を導いた先駆的役割を充分にはたしたものと見える。この書では *The Monkey's Straw Raincoat* としていて 'Straw' をいれていることを知った。

The Monkey's Straw Raincoat の歌仙から

——「鳶の羽ものの巻」——

『猿蓑集』を代表するといつか、もっとも人口に膾炙している句は「巻の一」 「冬」の発句「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」であろう。この句の由来を其角は序文に記している。'It seems that in former as well as recent times people have compiled haikai collections to demonstrate the dignity of this art.' 「俳諧の集つくる事、古今にわたりて、此の道のおもて起べき時なれや」とはじめ、『猿みの』と名付ける由来を次のように述べている。'While our Old Master Bashō was on his travels, seeking to receive the true soul of

haikai, he was passing through the mountains of Iga, where he clothed a monkey with a straw raincoat and gave it the spirit of haikai. It instantly cried out with a heartbreaking voice that overpowered us with the fearsome nature of this secret art.’ これは芭蕉が『奥の細道』の旅の後で、伊勢神宮に詣でて、故郷伊賀上野に帰る途中、伊勢の津と伊賀上野の間に山を越える峠で「初時雨」発句の想をえたといわれている。しかし、これには反対の説もあるので、Miner&Odagiri テキストでは左註に Some question exists whether this was written when Bashō was going to or from Iga. と記したが、いずれにしても初時雨にであったという状況は変わらない、と加えた。去来は『俳諧問答』の「贈其角先生書」のなかで「故翁奥羽の行脚より都へ越給ひける此、当門の俳諧已に一変す」といい、「序文」の発言に裏付けがある。

このような「序文」に続いて、

Bashō

| | |
|------------------|--------------------------------|
| Hatsushigure | The first winter drizzle |
| saru mo komino o | the monkey too seems to desire |
| hoshigenari | a little straw raincoat |

「初時雨猿も小蓑をほしげ也」の状況は一見して、即、想像できるが、読者は心のなかで、山中を歩いているとき、思いがけず初時雨にあう、旅人は小蓑を用意しているが、それをみている子ざるがあたかも、わたしも蓑が欲しいよ、と訴えているように思える。

山の峠で出会った猿に対する感情移入が極く自然になされていて、「〈猿—蓑〉の類想ながら、哀猿断腸」の旧套を脱した。」という評⑥もうなずける。

詩歌の翻訳に際して悩まされる問題の一つに語順の処理の仕方がある。この発句では、すでに記したように、[初しぐれ/The first winter drizzle] と原句と訳は揃えている。「猿も小みのを/the monkey too seems to desire」では終わりの「ほしげ也」をも含む、すなわち主語=さる、述語=ほしげなりというように変えざるをえない。最後に、目的語=小みのをおくことにな

る。「なり」という感動を表す表現は「！=Exclamation mark」をおいて表す方法をとる翻訳者もいるが、「かな、や」などに感嘆符をふしていると、俳諧・発句は驚いてばかりいるように思われるので、今回の訳法としてはできるだけ避けている。最後に、俳諧・発句・歌仙の英訳の諸問題はまとめることにするが、以下歌仙の実例を示しつつ、個々のケースでも問題提起していく。

マイナー・オダギリテキストでは上記「初しぐれ」に記したように、左に註等を付して、右頁にローマ字書きの stanza (句) と並べて英訳 stanza を置いているので、本稿でも同形式にしたい。連句の連続性を表すためにもテキストの通りに表記し、日本語の原句は鑑賞文中に記すこととする。ここで取り上げる「鳶の羽ものの巻」歌仙は芭蕉と去来・凡兆・史邦の『猿蓑』俳人の代表ともいべき三人による「俳諧の座」である。

| | | |
|---|---|--|
| 1 | Tobi no ha mo kaitsukuroinu hatsushigure <i>kyorai</i> | Even the kite's feathers have been tidied by the passing shower of early winter rain |
|---|---|--|

この発句は巻の一の巻頭句「初しぐれ猿も小蓑をほしげなり」に去来が答えたものという。kaitsukuroinu ^{かいつくろひ}「刷」ぬとは、中村俊定註解によると、鳶の羽はけば立った感じのものであるが、今はそれが時雨にぬれ、しっとりと落ち着いて、寒々とした姿になった状況である。'tidied' とはきれいになった、とか整えられたという意味である。日本人の私にもこの発句を一読したとき、即座にかいつくろうという状態は想像できにくい。頭あるいは、心の中で初時雨が降ってきて、鳶の羽がどうかなった、ある変化をおこした、いかなる変化なのか、と想像をめぐらす。「かいつくろひぬ」の意味を調べて理解する。英訳の語順は第一節は並ぶが、にわか雨によって整えられてと、第二節では、三節の初時雨を加え、三節で「初時雨」は、初秋に降る雨という季語を言葉で表現して、英語圏読者にしめした。また、座頭マイナー教授のセンスで上・中・下句を5・7・5の音節に揃えて17文字の原句の雰囲気を変え

ようとした。

| | |
|--------------------|--|
| Tobi no ha mo | Even the kite's feathers |
| kaitsukuroinu | have been tidied by the passing shower |
| hatsushigure | of early winter rain |
| 2 hitofuki kaze no | stirred by a single puff of wind |
| ko no ha shizumaru | the withered leaves grow still again |
| <i>Bashō</i> | |

本テキストの左注のはじめに、Design・Ground, Close・Distant という語が記され、発句は No relation としている。脇句では Design. Heavy-Light とみている。この内容は本『人文学研究』第4輯「英訳連歌抄」に記しているが、連歌における前句との連続性・関連性を表している。連句でも同様に、前句とのつながりが密接な場合、Close〈親〉で Distant〈疎〉とはその反対の場合である。Design〈文〉について、小西甚一博士は宗祇の『水無瀬三吟百韻』の発句「雪ながら山もと霞む夕べかな」の解説の中で説明されている。「遠山の裾に霞みのたなびく夕景は、日本の景色でも代表的な美しさだが、さらに雪の白さまで、加わり、歌人の〈艶〉という趣が色濃く漂う。あるいは、歌人の〈艶〉と称する美は、このような趣のものなのである。当然〈文〉の句」⑦の一節から、艶・美・趣のキーワードをイメージしながら、座頭マイナー教授と本歌仙を鑑賞している。

脇句は芭蕉で「一ふき風の木の葉しづまる」とつけている。発句は「純然たる景の句」⑧で、「発句の荒涼とした余情をうけて、その場の景を添えた」⑨という。英訳の場合一ふきの風によって、どうなったかという状況の説明語がなければ理解し難い。したがって、'stirred' が必要になる。左注には、As the drizzle had affected the kite's feathers, the single gust of wind works on the dead leaves, both those on the ground and those still on branches. その結果木の葉―地上の落葉も梢の枯葉も―が静まり、まさに荒涼とした風景が身にしみる。Design〈文〉で、付けかたとしては Heavy-Light とした。

| | | |
|---|--------------------|--------------------------------------|
| | Hitofuki kaze no | Stirred by a single puff of wind |
| | ko no ha shizumaru | the withered leaves grow still again |
| 3 | momohiki no | from morning onward |
| | asa kara nururu | his trousers have been wetted |
| | kawa koete | in crossing streams |

Bonchō

第三句は凡兆で「股引の朝からぬるる川こえて」と付け、発句・脇句の自然から転じて初めて人事となっている。股引きを身につけるのは、人間で、男性と読まれる。ここから、his trousers とした。日本語の原句の場合、人称は不要であるのに、英語では必要となる。Since clothes imply a wearer, humanity is introduced for the first time. と左注に記した。そして、ここにてでくる person は旅人か、some villagers on a task と。左右対照に記しているの、一目瞭然であるが、「朝からぬるる」の状況を重くみて、語順を原句のように変えている。原句の語順をそのまま英語に置き換えると、trousers/from morning wetted/stream crossing/で、これでは英語圏の読者には何故、突然 trousers が出てくるのか、全く想像の圏外であろう。したがって、「朝からぬるる」を強調するために、上記の語順とした。発句・脇句はやや和歌・連歌の歌語の使用により成り立っているが、第三句の「股引き」という俗語が突然はつきりと使われている。ここに蕉風俳諧の俗性と伝統的雅びの風が共存していて、興味ふかい。そのようなところから、Ground-Design で、Light-Heavy と評した。

| | | |
|---|-------------------|-------------------------------|
| | Momohiki no | From morning onward |
| | asa kara nururu | his trousers have been wetted |
| | kawa koete | in crossing stream |
| 4 | tanuki o odosu | and he sees the bamboo bow |
| | shinohari no yumi | set to frighten badgers off |

Fumikuni

史邦が第四句「たぬきをおどす篠張の弓」を付けている。この句もまた野の風景なので、The person who has forded streams in 3 now on a house or a rural village scene と左注には記した。第一英訳に際して、誰がたぬきをおどすのか、迷ってしまった。たぬきを脅すのは、川をわたる人なのか、とか、または前句の旅人がそれを目にとめたのか、そうすると、そこの村人が狸をおどすためのしかけとして、篠張の弓をしかけたらしい、とか想像する。そこで“he sees”として、しかけた人は誰なのかはつきりさせずに、しかけを見た人を主語とすると、形として成立するので、このようにした。付合は Light-heavy で、イメージは豊かであるが、rural-village scene と解したように、小西博士のいわれる〈艶〉なる〈美〉とは、明らかに異なるので、Ground-Design とした。

| | | |
|---|-------------------|--------------------------------|
| | Tanuki o odosu | Not far from the bamboo bow |
| | shinohari no yumi | set to frighten badgers off |
| 5 | mairado ni | and through lush ivy |
| | tsuta haikakaru | crawling over the lattice door |
| | yoi no tsuki | comes evening moonlight |
| | <i>Bashō</i> | |

和英の句をくらべると、一見して第4句では、“and he sees the bamboo bow”であるのに、これをうけた第5句では、“Not far from the bamboo bow”と状況描写に変えている。「まいら戸に蔦^{はひ}這かゝる宵の月」なる月の定座の第5句はわざわざ、主語を加えることなく、自然の風景として訳している。Design 〈文〉で、Light-heavy とした。

| | | |
|---|-------------------|--|
| | Mairado ni | Through the lush ivy |
| | tsuta haikakaru | crawling over the lattice door |
| | yoi no tsuki | comes evening moonlight |
| 6 | hito nimo kurezu | he will not give to anyone |
| | meibutsu no nashi | the pears for which the place is known |

Kyorai

• • • •

前句のまいら戸に蔦が這うような家は山里か、にぎやかな場所から離れたところに住む人とみて、「人にもくれず名物の梨」には、主語を“he”と付し、「にも」をやや強調して“anyone”とした。語順は和英並列に近いといえよう。Ground〈文〉で、付けかたは Light-Heavy とみた。この句をもって、「初折の表」(歌仙を書き留める形式で、一枚目を初折といい、第6句までを、表に記入する。)は終わる。

| | |
|------------------|--|
| Hito nimo kurezu | He will not give to anyone |
| Meibutu no nashi | the pears for which the place is known |
| 7 kakinaguru | while he takes pleasure |
| sumie okashiku | sketching pictures with brush and ink |
| aki kurete | autumn nears its end |

Fumikuni

「初折の裏」は「かきなぐる墨絵おかしく秋暮れて」である。日本語の原句には「かきなぐる」のは「誰」即ち、主語はなくてよい。というより、前句から連続して、想像する読みが、連句として当然、そのつもりで付けていることを、前提にしている。しかし、英訳ではやはり行為者を必要とするので、「かきなぐる」人を“he”にしている。そして左注には、The translation interprets the succession of stanzas to mean that the stingy person is also the artist, perhaps overpreoccupied with his work. と説明して、前句とのつながりを述べた。Design-Ground〈文-地〉で、Light-Heavy とした。

| | |
|-------------------|---------------------------------------|
| Kakinaguru | While he takes pleasure |
| sumie okashiku | sketching pictures with brush and ink |
| aki kurete | autumn nears its end |
| 8 hakigokoro yoki | and what a joy he has in wearing |
| meriyasu no tabi | those fashionable knitted socks |

Bonchō

芭蕉は伝統を重んじながら、全く新しい俗な社会現象にも目を据えて、連句・俳諧を創作していると抽象的に既述した。第8句「はきごころよきめりやすの足袋」にはその新風が示されている。この句に先立つこと10年前に出た『洛陽集』にすでに「メリヤス」は句にとりいれられている。元禄三年(1690年)頃には、一般の人にも流行するほどであったのであろう。左注には 'The translation follows one line of interpretation, closely identifying the persons in 8 and 7. *Knitted* (meriyasu) toed-socks (tabi) became fashionable in the 1680s as an import and were worn in cold weather. と記している。「めりやすの足袋」のイメージは、さすがと思わせるので Ground〈文〉で、付け方としては Light-Heavy とした。

| | |
|------------------|---------------------------------|
| Hakigokoro yoki | What a joy there is in wearing |
| meriyasu no tabi | those fashionable knitted socks |
| 9 nanigoto mo | nothing that happens |
| mugon no uchi wa | while he refrains from talking |
| shizuka nari | breaks his inner quiet |
| <i>Kyorai</i> | |

[何事も無言の内はしづかなり]この句は「前句の足袋から能の舞台への連想がはたらいているようにもみえる」⑩という中村注をうけると、一見抽象的でイメージレスな退屈におもわれたこの句がなかなかの俳諧的なものととれる。前句では 'he' と主語を加えたが、前句を受けた上三節では不要で、'there is' とした。語順は並列しているが、「無言の内」を直訳すると 'in silence' で「しづかなり」は 'it is quiet' である。しかし、これではだれがどのように静けさをたもつのか、意味・状況も不明となる。この句の味わいは Ground〈文〉で、付け方は Light とした。

| | |
|-------------|-----------------------|
| Nanigoto mo | Nothing that happened |
|-------------|-----------------------|

| | |
|-------------------|-------------------------------------|
| mugon no uchi wa | during the time without a word |
| shizuka nari | broke the great quiet |
| 10 sato miesomete | just as the village comes into view |
| uma no kai fuku | a horn blows to tell of noontime |

Bashō

「里見え初^{そめ}て午^{うま}の貝ふく」であるが、第10句の前句のうけとめ方により上一句を過去にしたり、二句目の訳の 'he refrains from talking' の主体者を外して、上記のように状景にするなどの変化を加えた。左注では前句の「無言」の修行を終えて、山をおりてきたところ、村で正午にふかれる法螺貝の音が聞こえてきた、という解釈で英訳しているが、他の注では、山伏がじぶんたちの到着を知らせるための法螺貝をふくという読み方をしているので、このような取り方もあると明記した、が中村注でご教授いただいたことは、「例の連句文体で、〈里見え初て〉で句切れ、主体の換れがあるので、里を見るのは山伏（験者）、〈午の貝ふく〉のは村人ということになる」⑩とある。「連句文体」という形に注目させられた。Design-Ground, Light-Heavy とした。

| | |
|-------------------|------------------------------------|
| Sato miesomete | Just as the village came into view |
| uma no kai fuku | the horn blew to tell of noontime |
| 11 hotsuretaru | frazzled at the edge |
| kozo no negoza no | the straw coverlet from last year |
| shitataruku | is smudged with his use |

Bonchō

「ほつれたる去^こ年^ぞのねごぎのしたゝるく」について、修験者のイメージから貧しい村人の生活の場への転換で、これが俳諧の景色と思わせられる。Ground-Design. Heavy-Light とみた。

| | |
|-------------------|-----------------------------------|
| Hotsuretaru | Frazzled at the edge |
| kozo no negoza no | the straw coverlet from last year |

- shitataruku is smudged with his use
 12 fuyō no hana no the petals of the lotus flowers
 harahara to chiru fall one by one in splendor
Fumikuni

「芙蓉のはなのはらはらとちる」は前句とは、付合からみても 'one of contrast' と左注に記したように、蓮の花がヒラヒラと散る〈艶〉なる状況は、まきによきコントラストである。Design-Ground で Light。

- Fuyō no hana no As petals of the lotus flowers
 harahara to chiru fall one by one in splendor
 13 suimono wa the soup of clear broth
 mazu dekasareshi is given to us best of all
 Suizenji with Suizen laver
Bashō

「吸物^{まずでか}は先出来されしすいぜんじ」を見ても、日本人の私にも正直にいつて「すいぜんじ」がわからず、中村注を読みはじめて水前寺に産する海苔と知った。しかし実体を知り、味わったのはプリンストンでの共同研究から帰国して以後のことであった。前句の蓮の花からお寺での席の風景と見立てて付けた、と読んだ。「すいぜんじ」については左注に説明を加えた。Ground-Design で Heavy-Light とみた。

- Suimono wa The soup of clear broth
 mazu dekasareshi was given to us best of all
 Suizenji with Suizen laver
 14 sanri amari no but pleading that eight miles remain
 michi kakaeruku he sets off upon the road
Kyorai

「三里あまりの道かゝえける」故人を偲ぶ思い出の席であろうか、しかし帰路は三里もありますので、と前句の吸い物が供されたところで、失礼すると主催者に気持ちを述べる客とみて 'he' として、「三里」は凡そ8マイルとした。Ground-Design, Light-Heavy.

| | |
|-----------------|------------------------------------|
| Sanri amari no | Because eight miles still are left |
| michi kakaekeru | they set off upon the road |
| 15 kono haru mo | and this spring as well |
| Rodō ga otoko | the men as loyal as Lu T'ung's |
| inari nite | work another term |

Fumikuni

「この春も盧同が男居なりにて」では、まず盧同は T'ang poet' の説明を記した。史邦は、そろそろ春の句をださなければならないので、春になると年期奉公が交代する江戸時代の風習を表す「居なり」の語をだした。盧同のような隠遁者で風流な主人には忠実な召使いはお暇をもらわずに、そのまま仕えるということであるが。ここで盧同に仕える忠実な召使いを 'men' と複数にしているが、今再考すると、隠遁者に複数の忠実な召使いがいるだろうか、という疑問もでてくる。Ground-Design. Light.

| | |
|----------------------|-------------------------------------|
| Kono haru mo | This spring as well |
| Rodō ga otoko | the men as loyal as Lu T'ung |
| inari nite | work another term |
| 16 sashiki tsukitaru | the grafted trees reveal new growth |
| tsuki no oboroyo | in moonlight on a hazy night |

Bonchō

「さし木つきたる月の朧夜」月の句で、'Boncho solves problem very well' と左注にきしているが、前句を風流人の召使とみての付合であろう。「月」は秋を表すことが多い。'So he advances spring a bit and gives a spring moon,

with tree imagery that sets up Basho for a Flower stanza と記した。
Design-Ground, light-heavy.

| | |
|--|--|
| Sashiki tsukitaru tsuki no oboro yo 17 koke nagara hana ni naraburu chōzubachi <i>Bashō</i> | The grafted trees reveal new growth in moonlight on a heavy night covered with moss the stone basin stands to one side of flowering cherry trees |
|--|--|

「苔ながら花に並ぶる手水鉢」花の定座を芭蕉が付けている。左注には、'He gives a scene for viewing cherry flowers (always means by "hana" in haikai) but without mentioning the people who would use the old basin' と加えた。()内は英語圏読者のためであるが、今や日本語読者にも必要であろうか。苔の深緑に桜の薄紅色のカラーコンビネーションは苔をみたことのない国の人々には想像できない。芭蕉は前句のやや遠景から近景に目を移し、また伝統的「花」に日常生活の「手水鉢」を配していて絶妙である。Design-Ground, Heavy-Light とした。

| | |
|---|--|
| Koke nagara hana ni naraburu chōzubachi 18 hitori naorishi kesa no haradachi <i>Kyorai</i> | Covered with moss the stone stands to one side of flowering cherry trees his mind has now been relieved of the anger felt this morning |
|---|--|

. . . .
. . . .

「ひとり直し今朝の腹だち」と去来は前句の 'high tone' を 'anger' という言葉によって、俳諧的転換 'fine haikai style' となしえている。Ground. Light-heavy, とした。この第18句をもって、初折の裏が終わる。

| | |
|--------------------|--------------------------------|
| Hitori naorishi | His mind has now been relieved |
| kesa no hara dachi | of the anger felt this morning |
| 19 ichidoki ni | and in just one sitting |
| futsuka no mono mo | he has bolted down the rations |
| kūte oki | for two full days |
| <i>Bonchō</i> | |

「いちどきに二日の物も喰うて置^{おき}」18句の人物をうけて、同じく 'he' と主語をうけ、凡兆がややコミカルにうけて、付けている。Ground. Light.

| | |
|---------------------|-------------------------------------|
| Ichidoki ni | In just one sitting |
| futsuka no mono mo | they have eaten up the rations |
| kūte oki | for two full days |
| 20 yukike ni samuki | the feel of snow brings on the cold |
| shima no kitakaze | as northern winds blow on the isle |
| <i>Fumikuni</i> | |

「雪けに寒き島の北風」と史邦がうける。'Fumikuni suddenly opens the scene to wide expanses and brings back winter. This impressive stanza is particularly renga-like, と評した。前句の二日分の食い溜めは寒い地域の漁師の仕事に出る前の腹ごしらえとも思える。Design<文>で、付けかたは Light とした。

| | |
|-------------------|-------------------------------------|
| Yukike ni samuki | The feel of snow brings on the cold |
| shima no kitakaze | as northern winds blow on the isle |
| 21 hi tomoshi ni | to light the lamp |
| kurureba noboru | at yet another dusk he climbs alone |
| mine no tera | to the temple on the peak |
| <i>Kyorai</i> | |

「火ともしに暮れば登る峰の寺」去来の付け句は 'excellent' で, 'This is haikai beauty in contrast to 20. と加えた。安東次男は前句と関連して, 隠岐に流された後鳥羽院や順徳院の俳付けとみているが示唆的である。⑫ Design. Heavy-Light.

| | |
|--------------------|--------------------------------------|
| Hi tomoshi ni | To light the lamp |
| kurureba noboru | at yet another dusk he climbed alone |
| mine no tera | to the temple on the peak |
| 22 hototogisu mina | all the wood thrushes that he heard |
| nakishimaitari | have finished their summer songs |
| <i>Bashō</i> | |

「ほととぎす皆鳴き仕舞たり」芭蕉は見事に21句の俳諧性を強めた転じ方で, 前句の厳しい冬の状況を, ほととぎすの鳴き声を聴く季節にしている。前句の夕暮れ時に明かりをつけに山に登る人を和歌・連歌の伝統的風流人にみたと, ほととぎすの声を聴くことを楽しみにする人にしている。ほととぎすは和英辞書では 'cuckoo' とでていますが, 'cuckoo' は 'fool' の意味もあり, やや滑稽な雰囲気になり, この句のイメージを損なうので, 上記のようにした。Ground-Design. Light-Heavy とみた。

| | |
|-----------------|-------------------------------------|
| Hototogisu mina | All the wood thrushes that he heard |
| nakishimaitari | have finished their summer songs |
| 23 yasebone no | wasted to the bones |
| mada okinaoru | he still cannot summon strength |
| chikara naki | to rise from his bed |
| <i>Fumikuni</i> | |

「瘦骨のまだ起直る力なき」と史邦は全く異なった状況に置き換えている。前句のほととぎすの鳴き声をめでるひとを長患いのため, ほととぎすが鳴く季節が終わった, と嘆いている人として, それでまだ起きあがる力がない。

左注では、句の印象としては 'prosaic' であるが、'sequence' としてはみごとと評した。Ground. Light.

| | |
|--------------------|--|
| Yasebone no | Wasted to the bones |
| mada okinaoru | she cannot summon strength |
| chikara naki | to rise from her bed |
| 24 tonari o karite | her visitor finds the place is cramped |
| kuruma hikikomu | and borrows carriage space next door |
| <i>Bonchō</i> | |

「隣をかりて車引きこむ」と凡兆は『源氏物語』「夕顔の巻」の俳付とした。『去来文』に指摘されているといわれている通りである。したがって、前句は 'he' と男性にしているが、'she' でうけた。英語圏の読者のために、左注でこの条の説明を加えた。場面の転換、状況の変化など連句の虚構を楽しめる句で、Ground-Design. Light.

| | |
|-----------------|---------------------------------------|
| Tonari o karite | He used to find my place so cramped |
| kuruma hikikomu | he borrowed carriage space next door |
| 25 uki hito o | his neglect is heartless |
| kikokugaki yori | if only he would come again to see me |
| kugurasen | through my mock-orange hedge |
| <i>Bashō</i> | |

「うき人を枳穀垣よりくぐらせん」と芭蕉はつける。恋の句で前句をうけているがより物語的に、'my place' 'to see me' と訳した。やはり 'Tale of Genji' から "Ukifune" のイメージもあり、"k" の頭韻の重なりも印象的である。Ground-Design. Heavy.

| | |
|-----------------|--------------------------------|
| Uki hito o | His neglect is heartless |
| kikokugaki yori | but he went again to visit her |

- kugurasen through the mock-orange hedge
 26 ima ya wakare no now is the time of lovers' parting
 katana sashidasu and she helps him put on his sword
Kyorai

「いまや別の刀さし出す」と去来は忍ぶ恋の別れを「いまや」で切迫した、ドラマティックな雰囲気、しかも前句との続きは物語性をもっている、ととれる。テキスト左注では It is not clear whether the “ima ya” of farewell is imagined to be said/thought by/the woman alone. と記したが……。Design-Ground. Heavy-Light.

- Ima ya wakare no At the time of lovers' parting
 katana sashidasu she helped him put on his sword
 27 sewashige ni left all restless
 kushi de kashira o with her comb she worried her hair
 kakichirasu messing its lines
Bonchō

[せはしげに櫛でかしらをかきちらし]凡兆。恋人との別れのあとの女性の agitation が動作・状況を表す言葉で示されているが、24句からの『源氏物語』の雅びなイメージからはかけ離れてきている。Ground-Design. Heavy-Light.

- Sewashige ni In a restless state
 kushi de kashira o with his comb he worries his hair
 kakichirasu messing its lines
 28 omoikittaru summoning determination
 shinigurui mi yo to hazard his life in battle
Fumikuni

「おもひ切たるしにぐるひ見よ」と史邦は前句までの女性の句を男性でうけている。戦いという語は原句にはないが、「死ぐるひ」を戦場に赴く武士の心意気と読んだ。このような武士の姿は武者絵などでよくみられ、イメージしやすい。Ground. Light

| | |
|------------------|----------------------------------|
| Omoikittaru | He summoned determination |
| shinigurui mi yo | to hazard his life in battle |
| 29 seiten ni | in the chill blue sky |
| ariakezuki no | the yet remaining moon dissolves |
| asaborake | in the light of dawn |

Kyorai

「青天に有明月の朝ぼらけ」と去来はうけている。Kyorai introduces autumn after six miscellaneous poems and gives the third Moon stanza in its approved position. と、左注に記したように、第三の月の定座である。前句の武者が秋の早朝の澄みきった空気をうけて立っている姿まで、想像されてきて、まさに Design 〈文〉 で、Light.

| | |
|--------------------|------------------------------------|
| Seiten ni | In the chill blue sky |
| ariakezuki no | the yet remaining moon dissolves |
| asaborake | in the light of dawn |
| 30 kosui no aki no | as autumn comes to Biwa Lake |
| Hira no hatsushimo | and to Mount Hira with first frost |

Bashō

「湖水の秋の比良の初霜」芭蕉。琵琶湖という固有名詞は原句にはないが、比良・湖水により日本語圏読者には湖が琵琶湖とわかるが、英語圏読者のために Biwa Lake とした。助詞‘の’で名詞をつなぐ新古今和歌集のスタイルという多くの解説なども加えて、蕉風俳諧は革新性と共に伝統にも基づくことも強調した。Design. Heavy-light.

Kosui no aki no Autumn comes to Biwa Lake
 Hira no hatsushimo and to Mount Hira with first frost
 31 shiba no to ya his buckwheat stolen
 soba nusumarete the hermit in the wattled hut
 uta o yomu goes on writing poems
 Fumikuni

「柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ」と史邦は上五は、waka diction 和歌言葉でうけ、名残ノ折（二枚目の折）の裏をはじめている。蕎麦をぬすまれても歌を読む酒脱な人を思わせ俳諧的に転じて巧みである。Ground-Design. Light-Heavy とみた。

 Shiba no to ya His buckwheat stolen
 soba nusumarete the hermit in the wattle hut
 uta o yomu goes on writing
 32 nunoko kinarau and will adjust to padded clothes
 kaze no yūgure now that cold winds come with the dark
 Bonchō

「ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ」凡兆はぬのこ（木綿の綿入れ）により、そのような庶民的な防寒着を着ることにより、冬の訪れを前句に応じて、季節の移り変わりをも表している。Ground-Design. Light-Heavy.

 Nunoko kinarau I shall adjust to padded clothes
 kaze no yūgure now that cold winds come with the dark
 33 oshiōte jostled by others
 nete wa mata tatsu I sleep poorly and set out again
 karimakura on the rigors of travel
 Bashō

「押合て寝ては又立つかりまくら」と芭蕉が付けたこの句を英訳では、主語 “I” として、主観を強めた。旅の人芭蕉の実体験の反映と考えた。上五句の庶民生活と下五句の poetic diction との contrast は芭蕉ならではである。
Ground-Design. Light-heavy.

| | | |
|----|--------------------|---------------------------------------|
| | Oshiōte | Jostled by others |
| | nete wa mata tatsu | they slept poorly and set out again |
| | Karimakura | on the rigors of travel |
| 34 | tatara no kumo no | the foundry foot-bellows makes clouds |
| | mada akaki sora | reddening the sky before dawn breaks |
| | <i>Kyorai</i> | |

「たゝらの雲のまだ赤き空」去来。33句の旅人を they と転じて、旅立つ庶民が早朝から起きていて、目にする暁の空であろうか、Ground-design. Heavy-Light. とみた。

| | | |
|----|-------------------|---------------------------------------|
| | Tatara no kumo no | The foundry foot-bellows makes clouds |
| | mada akaki sora | reddening the sky before dawn breaks |
| 35 | hitokamae | they are making cruppers |
| | shirigai tsukuru | at the isolated house whose window |
| | mado no hana | looks on cherry flowers |
| | <i>Bonchō</i> | |

「一構鞆つくる窓の花」凡兆。花の定座。The legacy from 34 is a deserted, humble place, but the beauty is there in a nice connection with the reddish clouds of 34, と左注に記した。前句をうけて、寂しい村外れの馬具職人の窓べに咲く桜の花の取合せはまさに俳諧である。Design-Ground. Heavy-Light. とみた。

| | | |
|--|-----------|--------------------------|
| | Hitokamae | They are making cruppers |
|--|-----------|--------------------------|

shirigai tsukuru at the isolated house whose window
 mado no hana looks on cherry flowers
 36 biwa no furuha ni against the old loquat leaves
 konome moetatsu the new sprout luxuriantly.

Fumikuni

「枇杷の古葉に木芽もえたつ」史邦の挙句である。史邦は二つのカラーコントラストー古葉の濃い緑と新緑の若草色と、それらの間々の桜の花の薄紅色ーで終句を秀句としている。前句とのみごとな付合である。したがって、Design-Ground. Light-Heavy.

終わりに

すでに各スタンザの解説・説明等で具体的に述べてきたが、俳諧の英訳に関する諸問題を列記すると、
 <i> 日本語では文法上明記しないことが普通の数、すなわち単数・複数の点
 <ii> 原句では話者 (speaker) や行為者は明確でなくてもよい場合があること
 <iii> 日本語と英語の語順の違い (英語では主語・述語・目的語・補語ーSVO, SVOC, SVC, SVOOー)
 <iv> 英語の場合、動詞のテンスを明確にしなければならないが、日本語はほかしたり、不明瞭でよい場合が多い
 <v> 日本固有の動・植物の扱い方
 <vi> 切れ字 (や、かな) の処理の仕方
 <vii> 主語・述語などに当たる言葉がなくて、名詞と助詞しかない場合、
 があげられる。⑬

文中で、上記の7つの事柄をケース・バイ・ケースでとりあげ、訳し方についての方法を明らかにしてきた。また、日本固有の動・植物のほか、たとえば第13句の「すいぜんじ」は本来地名であるが、江戸時代の食通には吸い物に入れる海苔との共通理解があったのであろうか。残念なことに、現代日本人の私には当時 (1978年頃) 想像もつかなかった。解説を読んでも蕁菜のようなものかしらと、と思うのみであった。帰国後すぐ、東京地域で知人や全国から集まる当時の勤務大学で聞いてみたけれど、誰も食した経験はなかった。その後当地福岡に赴任して大学の授業 (「日本文学・文化外書講読」

の授業でこの句を担当した学生も、他の九州各地からの学生も食したことはないという人の方が多く、すでに購入して実物を有していた私が見せたことがあった。)芭蕉により俳諧の対象となったものは、当時の人々にも、きっと新鮮にひびいたであろうと、想像できる。

次に訳し方の方法について、問題提起をしてみたい。「梅若菜まりこの宿の
とろろ汁」は、同じく『猿蓑集』の巻の五「餞乙州東武行」の芭蕉の発句である。因に直訳してみると、/plum fresh leaf/Mariko's inn/yam soup であろう。「まりこの宿くの」とろろ汁」の助詞くのを落としているので 'of yam soup' とする。しかし、これでは如何に、想像をめぐらしても英語圏の人でなくてもわからない。現に、本学の授業時では、はっきりとはわからないというのが、日本人の学生の反応であった。この句はただ、「梅若菜」「まりこの宿」と「とろろ汁」の三語でなりたっている。春の梅若菜の頃、丸子宿で供される、ご飯（あるいは麦飯）のうえに出し汁でのばしたとろろをかけて食する、というように具体的な説明を要する。白石注を参照すると、「梅が咲き初め、若葉の萌ゆるいい時節、東海道は丸子宿のとろろ汁がいいの意。名詞を三つ取り合せただけの構造。俳諧古今抄に三段切と称し〈若菜は植物と食類とに結前生後の働きありて、とろゝは梅若菜のつやを崩す十成の俳諧体なり〉」^⑭と記されている。1978年の共同研究時には、この注は未だ出版されていなかったが、このような状況を想像して以下のように訳したのである。

| | |
|--------------------|------------------------------------|
| Ume wakana | Plum blossoms and fresh shoots |
| Mariko no shuku no | enjoy them and the famous yam dish |
| tororojiru | when you stop at Mariko's |
| <i>Bashō</i> | |

「梅若菜の巻」は芭蕉がこれから江戸に向かって出立する乙州のために催した餞別の歌仙である。芭蕉はその前年から大津の乙州の家に滞在して年越しをしたのであるが、家業のために江戸に赴く弟子の旅に、少しでも楽しい、変化にみちた旅を願って、開催した歌仙を芭蕉は自らの発句ではじめたのである。このことを思うと、芭蕉を主語として、“I stopped at Mariko's and

enjoyed famous yam dish” と訳すことも可能である。しかし、発句は当然芭蕉の乙州への挨拶でなければならない。それを考えると、芭蕉を主語とすることはおかしい。芭蕉はすでに味わっているからこそ、あなたも食してみたいはいかが、といえるのである。丸子宿のとろろ汁は名物として、歌仙に参加している、乙州はじめ座衆には当然、共感をもって、うけとめられていたのである。したがって、芭蕉から乙州に贈る言葉として、“when you stop at Mariko’s” とした。丸子のとろろ汁を味わったこともない人々に『猿蓑』によみこむことによって、畿内地方の名物や丸子を歌枕の俳諧的パロディ化した、ともいえる。歌仙の訳法は付け合いを考えて、前句を“he”としても、女性で受けることが必要になるのは、すでに上記で示している。限られた枚数ゆえ一巻きのみしか、本稿では披露できず残念であるが、いずれ機会をえて興味深い『猿蓑集』の他の巻をも示したいと願うものである。

注

- ① 参照 *Earl Miner, Japanese Linked Poetry*, Princeton University Press, 1977 小田桐弘子「英訳連歌抄」『人文学研究』第4輯，福岡女学院大学人文学研究所2001，p.35-p.60
- ② 白石悌三『芭蕉七部集』校注（新日本古典文学大系70），岩波書店，1990，584頁
- ③ 中村俊定作品解説「詩あきんどの巻」（虚栗）『連歌俳諧集』（日本古典文学全集），小学館・刊，昭和51，372頁
- ④ 前掲書 ③に同じ
- ⑤ 同 432頁
- ⑥ 前掲書 ② 261頁
- ⑦ 小西甚一『宗祇』（日本詩人選）筑摩書房，昭和46，178頁
- ⑧ 前掲書 ③ 448頁
- ⑨ 同 ⑧
- ⑩ 同 451頁
- ⑪ 同 ⑩
- ⑫ 安東次男『芭蕉七部集評釈』集英社，昭和48，第21句だけではなく，本稿作成にあたり，あらためて再読し，多くの読み方や示唆をいただいたことを，記して感謝いたしたい。
- ⑬ 『比較文学』第四十三巻に太田靖子氏が「ホ・セ・ファン・タブラーダのハイカイ集『ある日……』における日本の俳句の影響」と題したご論文を發表されている。文中，ヨー

ロッパに伝えられたといわれている「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」の「胡蝶」の訳の数のいろいろを紹介している。タブラダは英訳，アストンを参考としたとし，アストンは蝶を複数とし，クーシューとルヴォンは単数にしているなどをそれぞれの原著にあたり報告され興味深い。単数・複数の問題だけでなく，スペイン語圏で初めて世に出されたハイカイ集の「ハイカイを分析し，日本の俳句との関係を考察する」ことを目的とされたものであるが，やはり翻訳上起こってくる諸問題にも，一読者として気付かされて，一層の問題提起の必要性も感じた。

⑭ 前掲書 ③ 337頁